

メロス通信

不定期便



知らない者同士が、自分が呼ばれたい名前を書いた帽子を被り、円になって座る。そして、語らい、笑い合い、時に涙する。ここは、グループホームかいなんに隣接する地域交流施設スマイル会館の一室。地域福祉室メロスが関わった人同士の語らいの場「スマイルくらぶ」だ。その内容は、以下の通り。

- ① 参加者は、呼ばれたい名前を書いた帽子を被り、椅子に座る。
- ② 自己紹介、テーマの「うれしかったこと」・「嫌だったこと」を ハート形のクッションを持って話す。
- ③ 3つのルール
 - テーマについて、正直に話すこと。言いたくないことは話さなくていい
 - 積極的に人の話を聞くこと ● 秘密を守ること



はなす、
はなす、
はなす、

スマイルくらぶ、

ここに集った人たちは、年齢も家族構成も違う、そして抱えている悩み・課題・事情も違う。共通しているのは、悩み・課題・事情が爆発したり、一人では抱えきれなかったりした時に、メロスと出会ったということ。メロスが掲げる伴走支援とは、「つながり続けること」。その実践を通じて、気づいたことがあった。「つながり続けること」には、メロスの力だけでは足りなくて、出会った人同士のつながりの場が必要であるということ。今日初めて出会った人同士だけれど、人の話を真剣に聞き、まるで自分事かのように受け止める。そして、笑い合い、泣き合い、励まし合う。いろんなものを抱えながら、どっこい生きておられるのだ。かっこいいのだ。

スマイルくらぶでの語らいで、誰かの問題が解決したわけではない。お互いが、少しでも自分のことを話して、聞いただけ。それでも、参加者からは、「スッキリした」「みんなから勇気をもらった」「また来たい」と声が上がった。

この文章を書いているときに、「はなす」とキーボードで打って変換してみた。「話す」の次に出たのは「放す」「離す」だ。スマイルくらぶで「話す」ことで、一人で抱えきれない思い・悩みを、自分から少し「放し（解放し）」て、少し「離す（距離をおく）」ことが出来たのではないかと思う。それには、「話し」「放し」「離し」たものを、受け止めてくれる人がいたからこそ、安心して「はなせた」と思う。

今回、「つながり続けること」とは「ひとりにしないこと」と気づかせていただいた。

県連ソーシャルワーク委員会報告

6月30日、宇部市（健康福祉部・こども未来部）との懇談をしました。

懇談の目的は、アウトリーチの実践報告を通じて、市民の「療養権」「生存権」をいかに保障していくかを行政と健文会とともに考えていくものです。双方にとって有意義な懇談となりました。懇談内容は、以下の通りです。

- ① 無料低額診療事業を通じて、見えた市民生活の実態
- ② 住居～車上生活者の住居設定・生活再建までの支援～
- ③ ヤングケアラー～母親の入院から発見したヤングケアラーの実態とその支援～
- ④ 高騰する電気代～在宅酸素の患者さんの支援～
ソーシャルワーク実践を積み重ねている健文会が制度改善や行政・多団体との連携のハブとなるべく定期的に懇談をしていきます。



外国人が日本で暮らすとこととは...

先日、地域福祉室に困窮者支援のどこかで活用して欲しいとお菓子が届きました。送り主は、宇部市在住の外国人女性Aさん。お母さんが4年ぶりにAさんに会いに来日。喜びも束の間、お母さんの持病が悪化、Aさんもどうしていいか分からなくなってしまいました。

組合員であるAさんは、組合員理事さんに相談、協立病院への受診の運びとなりました。言葉も通じない、異国での体調悪化、Aさんのお母さんは大きな不安を抱えたままの来院。診察前に地域福祉室スタッフで、話を聞きました。通訳はAさん、流暢な日本語で、お母さんも次第に安堵の表情とられました。その後、体調も回復され、無事に帰国されました、その時のお礼に、お菓子と「あの時、本当に親切にして頂き、ありがとうございました。」と感謝の言葉を添えられました。そして「日本大好きな私ですが、外国人が日本で暮らすと色々苦勞があるんです」とポツリ。近々、Aさんの話を組合員理事さん・支援部・地域福祉室で聞く予定です。<データ>宇部市の外国人登録者数 2,046人 (R3年度)

